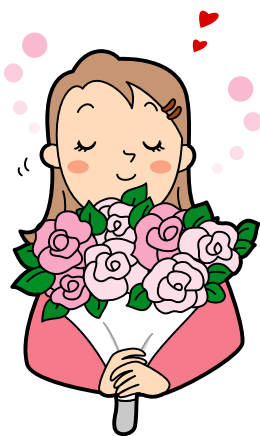


07

匂いと臭いにお



「ころときめきするもの……よきたき物たきてひとりふしたる」と『枕草子』(第26段)にもあるように、くらしの中でよい匂いにお(ニオイ)を楽しむということは、すでに平安時代から貴族たちの間で行われており、現在もさまざまな香りの芳香剤等ほうこうざいを使ったルームフレグランスが楽しまれているようです。一方で、昨今の清潔志向も反映してか、不快な臭いにお(ニオイ)はすぐにでも消したいという欲求も強まっており、消臭剤や脱臭剤等も普及してきています。

私たちの身の回りには数多くのニオイが存在し、私たちの生活と密接な関わりをもっています。当センターには、化学製品や化学物質のニオイについての苦情や問い合わせも多く寄せられていますが、そもそも「ニオイ」とは一体どのようなものなのでしょうか。

ニオイは、空気中をただようニオイ成分の分子が呼吸によって取り込まれ、鼻の奥にある神経細胞しんじょうたいの受容体にキャッチされて、その信号が脳に伝わり感知されます。ニオイ成分は40万種以上あるといわれていますが、ひとつのニオイ成分でも濃度が変わると異なった感覚を受けることがあり、例えば、低い濃度ではバターのような匂いに、高い濃度では汗の臭いに感じられるものもあるそうです。また、ひとつひとつはよい匂いでも混ざり合うと不快な臭いに感じられたり、糞便ふんべんのニオイ成分の一種をわずかに加えることにより香水の香りに奥行きが感じられたりするなど、複数のニオイ成分の相互そうさい・相殺作用によって感じ方が変化することもあります。

個々のニオイ成分の分子構造は徐々に解明されてきていますが、ニオイと分子構造との間の明確な関係は明らかにされていません。青葉の香りのするニオイ成分とほんの少し構造が変わるだけで菊の花の香りのニオイ成分になるといったように、似かよった分子構造をしていてもニオイが異なる場合もあります。その反対に、分子構造が異なってもニオイが似ている場合もあるのです。

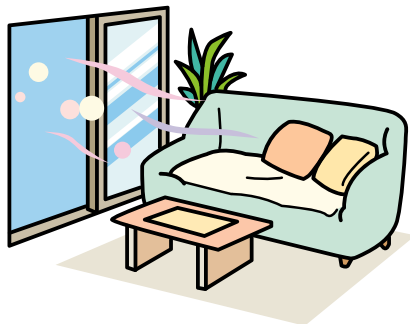
しかも嗅覚きゅうかくには個人差も大きく、同じニオイを嗅いでも、人によって快・不快の印象が異なったり、全く同じ濃度のニオイでも感じる人と感じない人がいたりします。このように、ニオイ成分とそれを感じ取る嗅覚の関係については未解明の部分が多く、ニオイを官能的に分析・評価する方法もまだ確立されていないというのが現状です。

また、ニオイを感じる事ができる最低限の濃度を閾値^{いきち}といいます
が、この値はニオイ成分ごとに異なります。低い濃度でもニオイを
感知できる成分もあれば、高い濃度にならないとニオイを感知でき
ない成分もあり、必ずしもニオイがするから濃度が高く、ニオイが
しないから濃度が低いとはいえないのです。

したがって、「化学製品等の臭いにより体調が悪くなった」という
相談の場合、ニオイ成分の濃度やその人のニオイに対する感受性な
どが複雑^{から}に絡み合うため、臭いと体調不調との間の因果関係を証明
することは非常に困難です。

しかし、不快と感じる臭いを吸い続けなければならない当事者に
とっては、深刻な問題です。臭いを消すための方法として最も効果
的なのは換気により部屋の空気を入れ換^かえることですが、炭や茶ガ
ラ等の吸着剤、空気清浄機、また消臭剤等を利用するという方法も
あります。

広義に消臭剤と呼ばれているものには、①ニオイ成分を化学的に
中和^{ちゅうわ}・分解してにおわない成分に変えてしまうもの、②微生物を用
いてニオイ成分を生物的に分解するもの、③ニオイ成分を物理的に
吸着したり包み込んだりすることによって抑^{おさ}え込むもの（脱臭剤）、
④より強い香りのニオイ成分によって感覚的に感じなくさせるもの
（芳香剤、防臭剤）などがあるので、使用後に臭いを感じなくなった
からといって、ニオイ成分その物が除去されたとは限りません。不
快な臭いを一掃したいと思うあまり、消臭剤等を使いすぎたり、複
数の製品を併用^{へいよう}したりすると、ますます不快な臭いになったり、か
えって室内の化学物質の濃度が増えてしまったりする場合もありま
すので、ニオイや化学物質に敏感な方は注意が必要です。



特に冬の季節、暖房して閉め切った部屋の中では、建材、洗浄剤、
殺虫剤等から発生する揮^{きはつせいゆうき}発性有機化合物^{かごうぶつ}のほか、人間の
吐く息やタバコ、調理の際の煙、ペットの毛、ダニ、
カビ等、様々な要因によって室内の空気が汚染されてい
ます。まだまだ外は寒い日が続きますが、定期的に窓を
開けるなどして、空気を入れ換えましょう。

(平成14年1月)